

「悪と戦え」（エフェソ六章一〇～二〇節）

1 血肉ではなく

今日は宗教改革者ルターの一つの故事（伝説）から話しを始めたいと思います。ルターが悪魔にインク壺を投げつけたという事件です。

ルターがヴァルトブルク城にかくまわれていたときのことです。彼はカトリック側からの信仰の撤回要求を拒否したため、ドイツ皇帝から帝国追放令を受けたわけですが、ルターに味方するザクセン領主の計らいで、約十ヶ月、ヴァルトブルク城に、偽の名前を使って隠れ住んでいました。

彼は非常に孤独を感じたらしく、その頃の手紙に孤独の荒野で多くの悪魔たちの手に委ねられていると書いています。しかしこの間ルターは執筆活動に励み、その最大の成果が、三ヶ月たらずで完成した新約聖書のドイツ語訳でした。

この前紹介した宮田先生の近著（『ルターはヒトラーの先駆者だったか』）を参考にこのルターの伝説について申し上げれば、悪魔は聖書をドイツ語にすることがとくに気に入らなかつたようで妨害しようと考え、あるときは階段をガタガタさせて執筆していたルターをびっくりさせたり、またあるときは大きなクロバエの姿をとってブンブン飛びまわり、ルターも追いかけたが捕まえられないこともあった。そして最後には悪魔が生身の姿で現れ、それが暖炉の隅で眼をギラギラさせてひそんでいるのをルターは発見、彼は怒って、悪魔に「くそくらえ！」と叫び、インク瓶を投げつけたのです。悪魔は呪いの言葉を吐きながら、現れたときと同じ暖炉の穴を通って姿を消した。そしてその後ずっと、その壁には、じっさいにインクのしみ跡がついていたというのです。

ヴァルトブルク城のルターが住んでいた部屋を私も一度見学したことがあります。はるか山の上にこの城はあり、その一番上、代官役所二階の奥まったところにある彼の小部屋は見物人が絶えません。私が行ったときには重厚な机の右上の壁には悪魔の人形がピン留めにしてありました。

事実か伝説か、それも含め詳しいことは、しかるべき本で調べていただくことにして、今日なぜこんな話からはじめたかという点、私も現代人には悪魔などきわめて縁遠い、この世界を考えるとき、そんなものの存在は頭がない。眼に見える現実、経験できる現実、計算可能な生の現実だけを現実として、それ以外は非科学的、古くさい、間違った現実の理解だと考えている。つまり悪霊も、したがって神もいないし想定しないのが現実認識。何かが悪魔の仕業と見るとか、そこに神の働きを感じるとうような発想を私どもは全くしなくなってしまうのではないだろうか、そのことを申し上げたかったからです。もちろん何でも悪霊に、何でも神様に直結して考えることが正しいとはまったく思いません。そういった見方から自由になったのも人類の一つの進歩だからです。

しかし私どもが私ども人間を越えたものへの恐れとか、謙虚さとか、そういった思

いまでなくしてしまつたら、それこそ現実を、私ども自身のことを、この世のことを正しく考えることができないうちに思います。そのことを今日の聖書箇所、とくに一二節は私どもに改めて注意を促しているように思われます。

わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものです(一二節)。

「血肉」とは人間です。「わたしたちの戦い」とは教会の戦い、私どもの日々の信仰の戦いです。

私どもの日々の信仰の歩みはここで「戦い」ととらえられています。なぜ戦いとならざるをえないのか、それは私どもの歩みが神に敵対するもろもろの力、「支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊」の攻撃にさらされている、脅かされているからです。

そうした神敵的な力との戦いに人間は自らの信心の力のようなものをもって対抗することなどできない。神の武器、そのすべての武器をもって装われ、それによつてしつかり立つ以外にない。パウロはここで、主にあつて強くあること、主のもろもろの力において強くなるようにと第一に命じています。

2 神の総武装

信仰の歩みは信仰の戦いとならざるをえないといま申し上げました。戦いですから勝ち負けはつきものです。しかしこの戦いにはすでに決着がついている、神の勝利に終わったことを私どもははっきり確信しておかなければならない。信仰の戦いはそうして確信に立つて戦われる戦いです。

今日の聖書箇所はエフェソの終わりの部分ですが、この手紙ははじめのほうにすでにこの戦いには決着がついていることを語っています。その上での今日の箇所での信仰の戦いへの励ましです。

神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました(一章20:22節)。

ここにキリストによる神の勝利が証しされています。この世の主キリストを、教会も主としていただき、その勝利にあずかっているということです。

ヨハネの黙示録に面白いことが書いてあります。それは天で戦いが起こつた。天使ミカエルとその使いたちが竜(悪魔)とその使いたちに戦いをいどんだ、竜たちも応戦したが勝てなかつた。その結果、「もはや天には彼らの居場所がなくなつた。この

巨大な竜、年をへた蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである」(12:9)。それゆえ地上での戦いそのものが天の勝利を証しているのです。

神と悪魔の戦い、キリストによって決定的な勝利は神に帰した。天王山は過ぎたのです。しかしまだあちこちで戦いはつづいています。掃討作戦はつづいている、勝利を知っている者も、場合によつたら、まったく知らずに戦いつづけている兵士たちもいるかも知れません。しかし私どもはキリストの勝利を知って、確信してこの戦いを戦いつづけるのです。

私どもの信仰の戦いは神の戦いでもありません。神が戦ってください。そうであるため私どもも神の武具を身につけなければなりません。今日の箇所、とくに一四節以下で描かれている姿は、パウロがこのエフェソ書を書いた獄中(20)で見ていたローマの兵士がヒントになっているとも言われています。しかし一つ一つの表現は旧約のイザヤ書などから来ているものです。イザヤ書では神ご自身が、あるいはメシアが、武装して戦いに出て行く姿で描かれています(59:17)。しかし私どもこのエフェソでは私どもが神によって与えられた防具をまとい、防御のための装備と、攻撃のための武器を与えられて出て行くというイメージです。

神の武具を身につけなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。・・・また救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。どのような時にも、霊に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい(13-18)。

ひじょうに印象深い聖句です。大きく三つに分けられます。信仰の戦いの防具は真理、正義、平和です。私どもはこれらの上につねに立たなければなりません。信仰の戦いで私どもを守るのは、信仰と救いです。それを私どもはつねに思い起こし立ち返って戦いをつづけます。最後に私どもの戦いを前に進めていくのは「霊の剣」、すなわち神の言葉と祈りです。神の言葉と祈り、これは礼拝を指すといつてよいように思います(今日の学びの会の準備をする中でそれに思い至りました)。教会の、そして私どもの信仰の戦いを前進させていくのはこの礼拝なのです。

3 「主なき諸権力」

つい先日、一七日、神学研究の仲間私よりずっと若い一人の研究者が亡くなりました。天野有という方です。西南学院神学部の教授をしていました。驚くともひじょうに残念な気持ちです。今日福岡で葬儀が執り行われます。お父上が長く北四番丁の仙台バプテスト教会の牧師をしておられたので、あるいはご存じの方もおられるかも知れません。

天野さんの訳業の一つがカール・バルトの名著『キリスト教的生』の翻訳です。こ

これは晩年のバルトの講義（1959～61）で主の祈りがとり扱われています。主の祈りは、バルトにとつても、また私どもにとつても、この世におけるキリスト者の生き方の手引きを意味しています。

「御国を来たせたまえ」に関連してバルトは「主なき諸権力」という言葉を使って世界と人間を動かしている悪、悪になりうるもの、その代表的なものを、聖書に基づきながら四つあげています。今日の聖書箇所「天上の支配と権威」の現代版といつてもよいと思います。「主なき諸権力」というのは、主、すなわち神の支配を逸脱しコントロールを失い悪魔化する力です。

バルトが上げたのは、第一に、政治的なものの悪魔的な力です。政治的なものとは国家主義、全体主義的なそれであったり、社会主義的なそれであったり、バルトは民主主義的な理念も悪魔的なものになりうるのだといっています。第二に、富です。お金の力です。説明の必要はないでしょう。第三に、イデオロギーです。つまり、政治や社会的な観念体系、主義主張のことです。何々イズム、スローガン、プロパガンダなどでそれらは人を動かしていきます。そして第四に、地霊（人間的な霊）、この世の力への絶対的信頼です。たとえば科学技術の力、流行、娯楽などです。スポーツへの熱狂も上げられています。

今日私どもを動かすものは、バルトがここで上げた四つだけではないでしょう。主あるじがなくなれば、すべてが「暗闇の主権者」になりえます。世の支配や権威の一つとして人間を動かすのです。

「御国を来たせたまえ」という主の祈りの第二祈願の説明の中でバルトは以上のようなことを語っています。御国とは神の支配です。神のご支配をこの世においてまた私どもの人生において祈り求めるといふことは、こうした主なき諸権力、神の支配から逸脱した悪に対してしつかり立たせてくださいと祈ることです。そして祈るといふことは、自らの人間的な理解と能力の限界内で、そうしたものに抵抗し屈せず戦うということの意味します。

バルトが「主なき諸権力」の最初に政治的なものもつ悪魔的な力をあげた背景にはナチズムとの戦いのこともありました。ナチズムは国家社会主義という全体主義として、一切を国家に隷属させ、人間を暴力と欺瞞をもって抑圧し、その一元的支配を貫こうとする過程でユダヤ人を殺害していきました。政治的なものが悪魔化し、人間の指導者が真の神に代わって自らをその位置においたときの悲惨と混乱をバルトは身をもって体験し、これと戦った。まさに「主」なき諸権力と戦った。今日、憲法に基づく民主主義の国家として平和を国是として歩む日本ですが、いつどのような形でそうした民主主義や平和が失われ、人権を抑圧する体制へ変わっていくか、悪魔化するか、分らない。しかし決してそうであってはならない。私どもは「御国をきたせたまえ」と祈り、神の言葉と祈りを神の武器として神のご支配なることを願い求めていきたいと思えます。